

年史資料展示室の開設

年史編纂室

平成十八年十月十五日、関西大学簡文館の一階に「年史資料展示室」がオープンした。それまで年史資料は新関西大学会館南棟一階のインフォメーションロビーで展示されていたが、ようやく専用の展示室を持つに至ったのである。

関西大学の前身である関西法律学校が、明治十九年十一月四日に大阪西区京町堀の願宗寺で誕生してから、平成十八年は二度目の還暦、すなわち創立百二十周年という佳節にあたった。百二十年の歴史を有する大学ならば、みずからの来し方をさまざま資料や解説で理解してもらおう展示室はぜひとも必要である、というのが「年史資料展示室」設置の理由であるが、そこに至るまでの

経過は簡単なものではなかった。まずは「年史資料展示室」開設までのあゆみをふり返ってみよう。

「新関西大学会館」で資料展示

冒頭に示したように、簡文館のなかに年史資料展示室ができるまで、大学史の資料は新関西大学会館において展示されていた。

平成八年に関西大学の新しい顔として正門を形成する新関西大学会館（北棟・南棟）が完成し、翌九年二月十二日から北棟一階のアートギャラリーでケース八台を使用して年史資料を展示したのが、その始まりである。「関

西大学創設期展―関西法律学校の創設から福島時代の
関西大学まで―と題して行った初めての年史資料展
示にまつわる経緯や苦心談は、年史編纂室の職員であつ
た福井智佳子がしるした報告「関西大学創設期展に取り
組んで」(『関西大学年史紀要』第十号)に詳しい。この
企画展は二カ月余り、四月三十日まで開催した。

その後、北棟一階のアートギャラリーが就職資料室に
転用されることになったため、南棟一階のインフォメー
ションロビーに展示ケースを移し、常設的に展示を行う
ようになつた。平成十八年に年史資料展示室が完成し、
簡文館へ移転するまでの九年あまりの間に開催した企画
展示は次のとおりである。

「関西大学史展―千里山・天六時代―」

(平成九年十月三十日〜平成十年一月二十九日)

「関西大学墨跡展」

(平成十年十一月十一日〜平成十年十二月十九日)

「関西大学史展」

(平成十一年七月二十八日)

平成十八年九月三十日―常設展

「関西大学経済学部・商学部創設百年記念展示」

(平成十六年十月十二日〜平成十六年十一月五日)

これらの展示のうち、「関西大学史展―千里山・天
六時代―」については『年史紀要』第十一号に、「関
西大学墨跡展」については『年史紀要』第十二号に、常
設展として開催した「関西大学史展」については『年史
紀要』第十三号に、「関西大学経済学部・商学部創設百
年記念展示」については『年史紀要』第十六号に、それ
ぞれ準備から展示開始までの経緯をしるしている。

ところで、新関西大学会館南棟は正門のすぐそばに位
置し、多数の人が出入りする場所であるため、人目に触
れやすいというメリットはあるが、ロビーという性質
上、夏は高温、冬は低温の外気が日常的に流れ込み、さ
らには西面が大きくガラス壁となつているため、午後は
展示ケースに西日があたるといふデメリットがあつた。
温度や湿度、光量が一定しないという点は、展示資料に
大きなダメージを与える要因ともなり、いずれしかるべ
き所に展示場所を移動させたいという願いが次第に大き
くなつていった。



インフォメーションロビーでの展示状況

東西学術研究所跡地を年史資料展示室に

平成十八年四月、それまで東西学術研究所、経済・政治研究所、法学研究所の三つに分かれていた人文・社会科学系研究所の事務室が一つにまとまり、研究所事務室として再編されることに伴い、簡文館のなかにあった東西学術研究所事務室が児島惟謙館へ移転することになった。そのときは学内の事務組織が大きく改編される時期でもあったため、東西学術研究所の跡地はしばらくの間、空きスペースとなっていたが、東西学術研究所の隣室で年史編纂室が資料の収集・整理・保存や『百二十年史』の編纂作業を進めていたこともあり、最終的に年史編纂室が利用することになった。

そこで年史編纂室は、学内の五カ所に分散保管していた年史資料や図書を一括保管するため、六月に移転作業を行い、同時に旧東西学術研究所事務室（五十二㎡）と所長室（二十六㎡）の二室を展示室にするべく学校法人と交渉を行い、七月下旬に了承を得ることができた。

ちようどこのころ、年史編纂室は、創立百二十周年記

念事業の一環として『関西大学百二十年史』と『関西大学120年のあゆみ』（写真集）の編纂に忙殺されていた。特に、写真集の方は、記念式典ならびに記念校友総会で記念品の一つとするため、十月十五日までの完成をめざして編纂作業が大詰めを迎えていた。そういうさなかに展示室の開設準備が新たな業務として付け加わったのである。

そして年史資料展示室のオープンが、創立百二十周年記念校友総会の開かれる十月十五日を期すことになったため、『百二十年史』、『120年のあゆみ』、展示室、三者の準備が同時に進行する事態となった。十月十五日までに残された時間は二カ月ほどしかなく、夏季休業をはさんで、展示室の開設準備は時間との競争になった。

開設準備

八月三日に専門の製作者二社から展示室のデザイン案についてプレゼンテーションを受けたのち、業者選定の学内手続きを終え、決定した会社と具体的な作業を始

めたのは九月に入ってからのことであった。

研究所の所長室や事務室として使われていた部屋を展示室にすることから、電気関係や壁回りなど、全面的な改修工事が必要となった。工事は九月六日から始まり、二十日ほどかけて完了した。その間、工事と並行して展示解説や写真パネルの準備も進められた。

「年史資料展示室」は、常設展示室と企画展示室の二室から成っている。それぞれの展示室の構成（開設当初）を紹介しておこう。

常設展示室では、入ってすぐ右手に児島惟謙をはじめとする創立者十二人の写真を掲げ、正面には年史編纂委員の一人である山野博史委員（法学部教授）が発見した「関西法律学校規則」（明治十九年十月発行）の複製を展示、左手には学舎の変遷図と現在のキャンパスの写真、さらに映像で関西大学の歴史を理解してもらおうよう、液晶モニターを設置した。また、展示室に入ってきた人が自然と室内に進んでいけるよう、壁にはカーブをつけている。

液晶モニターでは創立百二十周年記念事業の一環とし



常設展示室の工事風景

て制作された記念DVDを上映しているが、モニターの前には、大阪市西区京町堀にある「関西法律学校発祥の地」碑のレプリカを設置し、その上面に操作パネルを取り付けて、年史資料展示室らしい雰囲気を出すよう工夫した。

モニターの向かいに見えるのは「関西大学略年譜」である。モニターの壁のカーブと対応するように、この「略年譜」の壁もカーブしており、その下には各時代を象徴する展示品を入れられるよう、個別のミニケースが5台並んでいる。「司法省法学校でボアソナードが講義した『性法講義』（明治十年六月刊行）とボアソナードの楯」「第一回卒業生津島（内田）重成が使用した矢立と筆」「明治三十九年に開設された福島学舎の跡地から平成十七年に出土した煉瓦」「専門部生の角帽（大正六年）」「アメリカン・フットボール大学日本一優勝記念バックル（昭和二十三年）」と全日本大学野球選手権大会優勝記念サインボール（昭和四十七年）」などが、これらのケースに収められている。

常設展示室では、創立期から現在までを「揺籃期」「発



常設展示室

展期「飛躍期」「拡充期」「関西大学第二世紀」の五つの時代に分け、新関西大学会館のインフォメーションロビーで使用していた覗き込み型展示ケース五台と縦型展示ケース一台を時代区分ごとに充当させ、展示ケースのうえには、それぞれの時代の概要をまとめた解説と写真を掲載したパネルを展示し、来室者に理解してもらおうようにした。それぞれの展示ケースの中身は次のとおりである。

その後、第五ケースは展示品を一部入れ替え、フィギュアスケートで活躍する高橋大輔選手や織田信成選手の金メダルなども展示するようになった。

一方、企画展示室は写真パネルを四方に取りつけられる展示フレームを部屋の中央に据え、周囲に縦型の大型展示ケースと、他大学が刊行した年史図書を並べた書架を配置するレイアウトになっている。

年史資料展示室の開設は創立百二十周年記念行事の一環とされ、博物館と合同で「明日を古(いにしえ)に学ぶ」という統一テーマを設定した。そのうち、年史資料展示室は常設展、企画展をあわせて「関西大学120年のあ

ケース	時代区分	展 示 品
第一 ケース	揺籃期（明治19年～大正11年） — 創立から旧制大学昇格まで	<ul style="list-style-type: none"> ● 児島惟謙直筆原稿「権利競争論序」（写真） ● 創立資金の受領書（複製） ● 垂水善太郎宛志方鍛書簡（複製） ● 関西法律学校講義録 ● 津島（内田）重成筆記の講義ノート（「法律学士手塚先生 法学通論」「講師小倉先生講義 人事篇前期之続」「井上先生 刑法講義」）
第二 ケース	発展期（大正11年～昭和20年） — 大学昇格から太平洋戦争まで	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学設立認可申請書（大正10年2月） ● 『千里山学報』創刊号と「学の実化」講座の講師として来学したポール・クロードル駐日仏国大使の手紙 ● 野球部第一次ハワイ遠征ポスター ● 第五代学生横綱・竹田繁七（写真） ● 勤労奉仕のときに大学が貸与した水筒 ● 戦地の校友から本学教職員へ宛てた絵葉書（軍事郵便）

ケース	時代区分	展 示 品
第三 ケース	飛躍期（昭和20年～昭和44年） — 終戦から大学紛争まで	<ul style="list-style-type: none"> ● 帽章・胸章・襟章など ● 岩崎卯一学長自筆原稿 ● 学生の文芸活動 ● 工学部学生募集要項（昭和33年）
第四 ケース	拡充期（昭和44年～昭和61年） — 大学紛争から創立百周年まで	<ul style="list-style-type: none"> ● 高松塚古墳の発見を伝える新聞と発掘風景（写真） ● 創立百周年記念事業・行事記録 ● 百周年記念会館落成記念国際シンポジウム（写真）と来学した司馬遼太郎氏の色紙
第五 ケース	関西大学第二世紀（昭和61年～現在） — 創立百周年以降現代まで	<ul style="list-style-type: none"> ● アイスアリーナ完成記念くす玉割り（写真） ● 佐藤信夫選手（写真） ● 大川久美子選手（写真） ● 稲田有紀子選手（写真） ● 五回糸東流空手道世界選手権大会、平成18年 ● 松村久基選手（写真） ● 学生射撃選手権大会、平成17年 ● 桂三枝氏（写真と色紙）
第六 ケース	関西大学第二世紀	<ul style="list-style-type: none"> ● サッカー部の総理大臣杯とトロフィー、賞状（平成17年）



企画展示室



簡文館特別展示の垂れ幕

ゆみ」という展示テーマにし、企画展に関しては、建学の精神に立ち帰るといふ趣旨から、「創立の時代に想いをさせて」として、創立期に限定した展示を行った。

企画展示室中央の写真展示フレームは、面ごとに「願宗寺時代」「興正寺時代」「江戸堀時代」「福島時代」の四期に分け、校舎や卒業写真など、あわせて十八点の写真パネルを展示した。一方、縦型展示ケースのなかには初代校長を務めた小倉久のトランク（日本で現存する最

も古いルイ・ヴィトン社製トランク）や関西法律学校第一回卒業生・津島重成の卒業証書などを並べて、本学の創立当時の状況を理解してもらうようにしたのである。

オーブン後のあゆみ

平成十八年十月十五日の記念校友総会当日、年史資料展示室には卒業生や大学関係者あわせて四百五人が訪れた。母校の歴史を分かりやすく理解できる年史資料展示室ができたことに対する賞賛の声も多数頂戴した。

「年史資料展示室」の開設を計画した当初、コンセプトの柱としたのは、簡文館のなかにある博物館と相まって関西大学の文化ゾーンを形成するということであった。そのため、あらゆる機会を利用して見学のPRを行い、平成十九年四月からは学内の教育職員に対し、新入生やゼミ生への導入教育の一環として博物館と年史資料展示室を見学してもらいたいと呼びかける案内も行った。その結果、夏休みまでの四カ月で約四千百人が年史資料展示室の見学に訪れた。

簡文館が登録有形文化財に登録

関西大学では、かねてから博物館を中心に、簡文館を国の登録有形文化財としてもらうべく文化庁に申請していた。審議の結果、平成十九年三月に登録有形文化財として登録されることになる旨の通知が届いた。関西大学の建築物としては初めての登録である。

簡文館は昭和三年に大学図書館として建設され、さらに昭和三十年に大幅な増築工事を行った。このとき、増築建物の設計を担当したのは、昭和四十二年に文化勲章を受けた村野藤吾氏である。簡文館が登録有形文化財として登録された理由としては、昭和初期に建てられた大学図書館の特徴を今によく伝えていることと、村野作品の一つであることが挙げられている。

簡文館が登録有形文化財となったことを記念して、年史資料展示室では平成十九年四月から「簡文館ものがたり」という企画展をスタートさせた。中央にある写真パネルの展示フレームでは、建築されて現在に至るまでの簡文館の歴史を四つのグループに分け、特徴的な写真で

時代ごとの説明を行った。また、壁面には設計者である村野藤吾氏と簡文館の略年譜をパネルにして掲示した。これらの展示は、都市環境工学部（建築学科）の学生などをはじめとして、各方面から好評を得ている。

展示室の今後

現在、大学には従来の教育・研究ということに加えて社会貢献ということが強く求められている。簡文館にある博物館は「開かれた大学」を地域に具現化する存在の一つであるし、年史資料展示室もまた似たような性格を有している。在学生や教職員だけでなく、卒業生や在学生の父母、地域の人びとやオープンキャンパスなどで大学の見学に訪れる高校生などに対し、大学の歴史を通じて情報発信をし、社会貢献を果たすことになるのである。

多彩な人びとを迎え入れることで、関西大学の過去・現在・未来の座標軸のなかから、関西大学の行く末を考えてもらう場の一つに年史資料展示室はなるべきであろう。今後どのような展示を行うべきか、という問いに對

する答えも、そうした視点から自ずと導き出されてくるに違いない。オープンから一年半が経過しようとする今、あらためてその想いを強くしている。

（学術センター次長 熊博毅）